（Ａ３判横）

平成２６年度　学校自己評価システムシート（県立和光南特別支援学校）

目指す学校像	児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた適切な教育を推進し、「生きる力」を育成する学校
重点目標	１　充実した授業づくり ２　開かれた学校づくり ３　健康で安全な学校づくり ４　進路指導の充実

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	１０名
	生徒	３名
	事務局（教職員）	９名

※ 重点目標は３つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目（年度達成目標を意味する。）は複数設定可。
※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学校自己評価								学校関係者評価
年度目標					年度評価（1月20日）			実施日　平成２７年３月９日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	・前年度はプランＢの評価部分の改善が行われた。来年度に向けて保護者への提示時期など、様々なことを改善する必要がある。また、教育課程を整理して、今後に向けた多様な教育課程について考える年にしたい。 ・研修に対する教員間の意識も高まっているため、研修をより充実したものにする。さらに、教職員一人ひとりの授業づくりに活かしていく。	・教育支援プランＡＢに関わる環境整備 ・教育課程の検討・改善 ・研修等の充実	①新書式プランＢの書き方の研修を行う。また、今年度の反省を踏まえ、来年度からのプランＡＢの保護者への提示時期・方法について検討する。 ②各学部の教育課程上の課題や学習内容を整理し共有することで、他学部との一貫性を持たせる。 ①職員研修の希望調査を行い、全校講演会、長期休業中の希望研修、企画、運営を行う。また、他校の見学などを企画する。 たｎ	①研修を行うことによって、よりよい書き方を考える契機とすることができたか。また、適切な時期を決め、教職員全体に周知することができたか。 ②教育課程上の課題を整理し、共有することができたか。 ①充実した研修会等が実施でき、授業実践力が高まったか。	①　プランB評価の書き方についての研修を１学期末に行うことができた。プランB実態部分の書式の検討や、来年度保護者にプランABを提示・提供するスケジュールを整えることができた。実施に際してはマニュアル作成を行っている。 ②　全校の日課表を比較し課題点を確認しあうことができた。経営案の項目の統一を図っていくという点をすすめることができた。 ①　複数化に関連するテーマをもとに、他校視察を企画し、実行することができた。 ②　職員のニーズに沿った充実した研修を実施し、研修で学んだことを授業で活かすことができた。	A	・次年度も継続して、充実した研修を行い、教職員一人ひとりの授業づくりに活かしていく。	個別の支援プランＡＢについて、保護者に提示することはもとより、発達段階によっては生徒自身にも読ませることで、個人の達成目標にするなどの活用の仕方を考えてもよいのではないか、 高等部の多様な教育課程は、中学校一般学級、特別支援学級など入学前の課程が異なることから、個に応じた指導を充実させるためには必要である。 研修会などによって、豊富な知識や実践など、新しい情報を得ることは教員にとって重要である。
2	・昨年度より本格的に実施した地域支援をより広げていけるように、支援の形態や方法を工夫し、広報活動もおこなっていく。 ・保護者アンケートについては引き続き実施し、学校と保護者間の理解や連携の指標として活用していく。	・地域のセンター的機能の充実 ・保護者の要望を受けとめる学校づくりの推進	①コーディネーターの支援をより充実させる。 ②地域へ向けた研修会をより充実したものとして開催する。 ①保護者アンケートを継続し、回収率及び満足度８０％以上を維持する。さらに内容を精査し、教育内容や教育環境の改善につなげる。	①地域からの要望を受けて組織的に支援できたか。 ②参加者のアンケート等により期待に応えることができたか。 ①回収率・満足度とも８０％以上を継続できたか。アンケート項目の改善が行われたか。	①　今年度は初めて幼稚園・保育園からの支援依頼もあり、支援対象は広がったが、支援依頼が同じ学校から継続する傾向があった。 ②　会場を公民館にし、公開研修会（８７名）・コーディネーター研修会（６９名）と参加人数も増え、アンケートに関しても高評価であった。 ①　回収率は８０％に満たなかった。 ②　校内の環境整備の意見もあったが、教育内容についての要望が多数寄せられた。	B	・支援の幅を広げるために機会を見つけて活動を知ってもらうと共に、地域校内支援部としての専門性を高めるようにする。	児童生徒一人一人に対する支援としては、臨床心理士にくわえて、言語聴覚士や作業療法士などの専門家を入れることにより、さらに進んでいくと思われる。その意味で今年度の試みはとても良いと評価できる。 アンケートは回収率も大切だが、まずは学校側がなんでも言える雰囲気を作り、そこから様々な変化や発展につながる。その意味でアンケートの自由記述欄とそれに対するフィードバックは良い。 アンケートの回収率を上げるには、アンケートによる成果を明示することも大切である。
3	・東日本大震災以降も地震が続く中で、市民の危機意識が高まり、より安全安心な学校づくりが求められている。 ・児童生徒の健康管理について、医療機関と積極的に連携し、組織的に取り組むとともに、児童生徒が学校生活を安全に過ごせる環境の整備を徹底する。	・緊急時対応訓練の実施及び一斉連絡の実施 ・児童生徒の健康の保持・増進と環境衛生検査や点検設備の徹底	①大震災に備えた訓練を継続して実施する。引き渡し訓練も継続する。 ②メールの不具合を解消し、システムの安定化を図る。新入生の登録をスムーズに行う。 ①健康観察や定期健診を適切に実施し、児童生徒の健康管理について家庭や医療機関と連携し、組織的に取り組む。食物アレルギーについては委員会を中心に対応していく。 ①月１回の安全点検により、適切な環境設備を行う。また、衛生面の維持向上に努める。	①訓練がスムーズに実施できたか。 ②メール配信が遅滞なく行えたか。 ①健康観察等が適切に実施でき、家庭や医療機関との連携が図れたか。食物アレルギーに対する適切な体制を確立することができたか。 ②安全点検が定期的に実施でき、また、衛生面の管理が適切に行われたか。	①　避難訓練・引き取り訓練は予定通り行うことができた。 ②　メール配信についてはPTAにより、業者による新たなシステムを導入した。 ①　健康診断や肥満防止教室等の結果を保護者に伝え、児童生徒の健康管理に努めた。食物アレルギーに対する適切な体制作りに努めた。 ②　月１回の安全点検を実施し、適切な環境設備を整えることができた。カーテンクリーニングの実施など衛生面の維持向上に努めることができた。	A	・児童生徒の健康管理について、継続して医療機関と積極的に連携し組織的に取り組む。 ・児童生徒が安全に学校生活を過ごせる環境の設備を徹底する。 ・カーテン・布団の定期的なクリーニング等、環境衛生面においての維持向上に努める。	引取り訓練や非常災害の時は、近隣の学校との連携が大切だと考えられるので、今後はそのようは働きかけを検討したらどうか。 一斉メールは加入率を発表してさらに登録者数を増やした方がよいと思う、

			・					
4	・発達段階や個々のニーズに応じた進路指導を行うとともに、保護者に対しても早い段階から進路について関心を持ってもらえるように努める。 ・生徒数の増加や地域の福祉の状況などから、実習先や就労先の確保が困難な状況にあり、今まで以上に情報収集や職場開拓が必要になっている。	・社会生活を行うための「生きる力」の育成 ・福祉就労の状況把握と実習先の確保	①各学部学年の日頃の学習の中で卒業後を見据えた指導や進路学習を行う。 ②保護者には保護者会、進路懇談会、「進路だより」等をとおして、情報提供や啓発を行う。 ①関係諸機関や他の特別支援学校とも連携しながら、情報収集や実習先の開拓に努める。	①個々に応じた進路指導が行えたか。 ②小中学部を含めた保護者への情報提供を的確に行うことで、進路指導に対する理解が深まったか。 ①実習先を確保し、生徒一人ひとりのニーズや適性に応じた現場実習を行うことができたか。	① 高等部では進路学習や面接指導等を行い、働くことや将来の生活への意識を高めるように努めた。 ② 「進路だより」を発行したり、保護者向け進路行事の対象を中学部からに広げるなど、情報提供に努めた。 ③ 希望を踏まえ、適性を考えながら実習先を決定するように努めた。高等部３年についても個々のニーズに応じた進路決定がほぼでき、一般就労率も３０％の見込みである。	B	・進路指導部が中心になって障害福祉制度や地域の福祉状況、障害者雇用の状況等の把握に努め、各学部で職員・保護者に情報発信をしていく。 ・進路に対する関心・理解が保護者によって差が大きい。講演会などの進路行事にできるだけ多くの方に参加してもらえるような方法を考えていく。 ・生徒数が増加しているので、今まで以上に積極的に職場開拓に取り組む。	進路指導については、一番大切なことは家庭でのサポートだと考える。学校と職場と家庭が連携して、生徒の特性を理解しながら、よりよい方向に持っていくと良い。 小学部のころから仕事を頼んた対価として、何かを与えていくなど、就労につながることを行う。また、一つ一つをきちんとし終える体験を積ませていくことが大切である。 実習最後の反省会ではよい言葉が、評価のシートになると厳しい評価になり、就労に自信を失う現状がある。そのあたりを改善していければよい、